

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22年度～26年度）

第4回大阪都市遺産フォーラム特別企画展

道頓堀今昔

—芝居画家 山田伸吉の世界—

展示図録

平成24年12月1日(土)～12月15日(土)

関西大学博物館 第2展示室
(関西大学千里山キャンパス)

ごあいさつ

学生たちと「大阪度テスト」なるものを行なっている。大阪のどこを知り、どこを知らないかを調べるというものだが、その結果は興味深いものがある。

四天王寺や住吉大社、大阪城、大阪天満宮、適塾、中之島図書館など大阪名所を10ヶ所選び、知っている度合いを、①行ったことがある、②知っている、③知らない、の三段階で調べると、群を抜いて得点が高いのはUSJユニバーサル・スタジオ・ジャパンで、ほぼみんな「行ったことがある」。それに次ぐのが道頓堀で、かの大阪城を若干、上回るという認知度の高さである。それに対し四天王寺や住吉大社、適塾は、名前を知ってはいても「行ったことがない」。国立文楽劇場や中之島図書館は、名前すら「知らない」者が多い。

このように道頓堀は、若い学生たちの間にも抜群の人気度を誇っている。人形のくいだおれ太郎や巨大なカニ、たこ焼き・ラーメン店など、「食い倒れの町」大阪を象徴する場所として、道頓堀は知られているのである。しかしそこにはもはや、芝居町であったという記憶はない。

私たち大阪都市遺産研究センターが、道頓堀に注目するようになったのは、画家山田伸吉（1901～81）と劇作家長谷川幸延（1904～77）の共作『道頓堀今昔』の寄贈を得てからである。

宗右衛門町から川越しに、夜の道頓堀を眺めた大作の余白には、つぎの句が並ぶ。

道頓堀の 今昔問はん アスファルト
箸おきて 古き芝居を かたりけり

大正12（1923）年に竣工なったネオ・ルネッサンス様式の松竹座で、長く舞台芸術家として活躍した山田と、劇作家として活動の舞台は東京であったが、しばしば山田と道頓堀で遊んだ長谷川の二人が、芝居茶屋あたりで飲みながら、即興で詠んだ句ではないだろうか。

それにしても彼らにとっても、芝居はもはや「古い」ものであった。道頓堀の変遷の激しさを想わせる一句である。

企画展実施にあたっては、関西大学総合図書館の全面的な協力を得た。また肥田皓三先生からは、貴重な資料を提供していただくとともに、玉稿をいただくことができた。心よりお礼申し上げたい。

平成24(2012)年 12月1日

関西大学大阪都市遺産研究センター長
藪 田 貫

山田伸吉氏と私

肥田 皓三



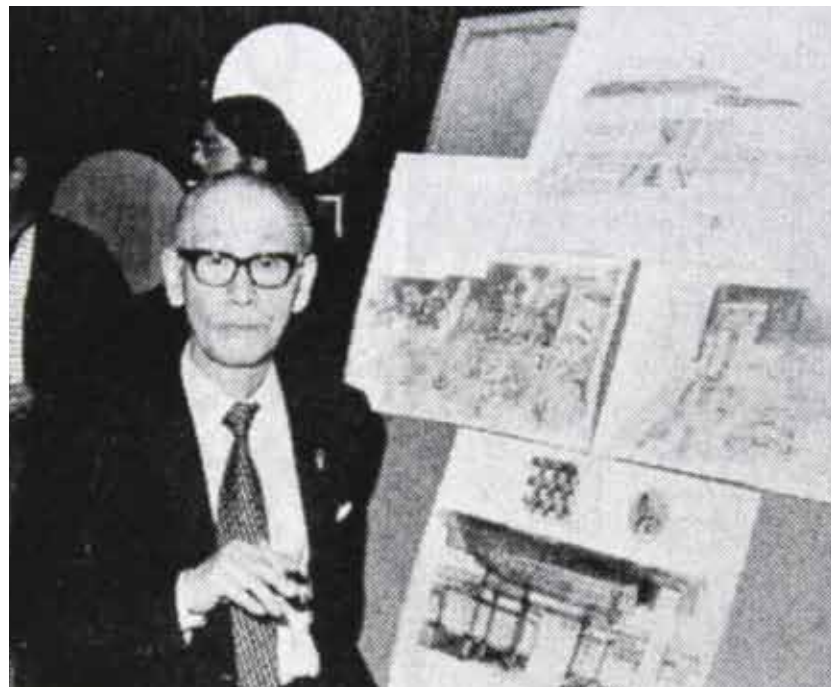
私は山田伸吉氏の晩年にすこしだけ親しくしていただいただけでご縁は薄かった。むしろ歿後に、山田氏生前のお仕事についていろいろ知る機会がふえたようなことである。昭和四十六年九月に天牛書店主人天牛新一郎さんを讃える会が梅田の本むさし会館の大広間であり、とても盛会であった。この集まりは作家の長谷川幸延氏を中心とするグループの発起で、この日の記念品として山田伸吉画伯の筆になる天牛さんの肖像画が主賓に贈られた。この絵はいま江坂の天牛本店に飾られている。長谷川幸延さんのグループというのは、鳥江鏡也、山田伸吉の両氏が主メンバーで、この三氏は青年時代に大阪の道頓堀と濃い繋がりがあり、長谷川氏は食満南北門下の新進劇作家として作品が道頓堀の劇場で上演され、鳥江氏は松竹宣伝部で雑誌『道頓堀』の編集にあたり、山田氏は松竹座宣伝部でポスターと「松竹座ニュース」毎号の表紙デザインの製作、やや後に松竹少女歌劇の舞台装置を手がけ、大正末期から昭和初めにかけてともに青春時代をすごした親友であった。この長谷川幸延グループが昭和五十年代に、いまでも云った天牛さんを祝う会をはじめ、大塚克三『舞台美術道具帳』出版記念会（昭51・2、宗右衛門町大和屋）、松本憲逸（戦前に池津勇太郎の筆名で朝日新聞の映画評を執筆）『まかり通る』出版記念会（昭51・8、新朝日ビル内アラスカ）、香村菊雄『船場ものがたり』出版記念会（昭51・11、平野町美々卯）、鳥江鏡也「大阪文化功労」受賞を祝う会（昭60・1、梅田東急ホテル）などを次ぎ次ぎ呼びかけ、若輩であった私はそうした集りの末席につらなり、またグループの忘年会にも数回出席して三氏の知遇を得るようになった。昭和五十五年五月に近鉄百貨店阿倍野橋店の美術画廊で山田伸吉氏の個展があった時、そうした縁で私は作品「坂東玉三郎の梅川図」の油絵を入手した。その後、間もなく山田氏が歿し、長谷川・鳥江両氏が「山田伸吉氏を偲ぶ会」を道頓堀のすし半（中座の東隣）の三階広間で催し、山田夫人と令嬢はじめ二十数名の出席があった。この部屋の壁面は、山田伸吉画伯の道頓堀風景に長谷川幸延さんが賛をした大作が描かれてあり、追悼にふさわしく、貴重な大阪の文化財の存在に驚いたのである。ずっと後年すし半が廃業した時にこの壁画は残念ながら毀たれ惜しむべきことであった。ただ幸いなことに、このすし半が別にもっていた山田画伯の「道頓堀風景」と「住吉大社祭礼」の二点の油絵大作が、奇々しき縁でいま関西大学大阪都市遺産研究センターに保存されていて、ふしぎなえにしがうれしい。また山田伸吉の舞台装置の原画多数ほか、ゆかりの品がセンターの所蔵に歸し、手厚い保護をうけていることを故山田伸吉画伯のためによろこんでいるのである。

❖ 山田伸吉のおいたち

大正から昭和にかけて松竹座の映画ポスターを描いたことで知られる山田伸吉（本名 真吉）は、1903（明治36）年6月13日に大阪府西成郡稗島（現 大阪市西淀川区姫島）に父山田敏之助、母ヒサの第二子として生まれたとされる。両親が早くに亡くなり、母方の親戚に引き取られ、精華小学校、旧制八尾中学校に進学している。

1903年に出生したとする根拠は、「映画人『明治グループ』の会」会員名簿1972年度版での記述によるものである。ところが、晩年に各地で開かれた山田伸吉個展の画歴には1904（明治37）年に大阪市内で出生していると記され、各資料にあっては、山田の出生年に齟齬が生じている。

山田は1945（昭和20）年4月に京都市上京区紫明町小山堀池から滋賀県野洲郡守山町西蓮寺へ転居しているが、その折の「転出認定証」（4月14日付 京都市上京区長発行）によると「山田伸吉43才」と記されている。前々年に生まれた娘永子の年齢が1歳6カ月であるため「転出認定証」に記された年齢は満年齢である。そうすると、山田伸吉が生まれたのは、1901（明治34）年となる。出生年の齟齬は早い頃に両親を亡くしたことと関係があるかもしれない。



❖ 松竹入社へ

山田が自らの半生と歌舞伎との関係を語った1975（昭和50）年6月18日付日本経済新聞の記事「油絵に縮尺 歌舞伎の舞台 あのシーン、あの役者、記憶をたどって記録する」では、「最初の仕事は小山内薫演出、市川左団次主演で京都・知恩院の山門を背景に演じられたページェント『織田信長』のポスターと映画『底なし沼』のポスターと栗島澄子、諸口十九主演の映画『底なし湖』のポスターであったことを今も覚えている」と語っている。野外ページェント『織田信長』は1922（大正11）年10月に行われているから、1922（大正11）年、山田伸吉19歳の時に松竹へ入社したとみられる。

松竹は、1895（明治28）年 大谷竹次郎が京都阪井座を買収し、1902（明治35）年には大谷竹次郎が兄の白井松次郎と共に、松竹合名会社を設立したことから始まる。1922（大正11）年4月に楽劇部を創設し、翌年5月には大阪松竹座を道頓堀に開場する。楽劇部は大阪松竹座専属となり初演は「アルルの女」であった。また1924（大正13）年には焼失した明治座を京都松竹座と改称、同7月には松竹キネマの下加茂撮影所が誕生する。この時期は関西での松竹の興行展開が著しい時期であった。

山田は演芸・演劇の興行と外国映画封切の劇場経営を行う「松竹合名会社」に入社し、様々な広告印刷物を手掛けるようになる。





※



※



※

❖ 松竹座ポスター

山田は先の日経新聞の記事で「ポスターの描き手不足のためか待遇はよかった。初任給で百円もらったが、私は何とか東京に出て絵の勉強をしたいと思っていたので『やめさせてくれ』というとそのたびに給料があがっていった。今でいう『居直り』である。ただ、仕事は猛烈にやった」とその頃を回顧している。

巷間では、松竹座ポスターのデザインやキネマ文字は山田の発明とされているが、松竹座ポスターにはサインなどの山田のオリジナルを示すものを見出せず、西村美香氏が指摘するように松竹宣伝美術部制作のポスターとして評価すべきと思われる。

むしろ山田の活躍は1927（昭和2）年頃から京都・南座や京都松竹座で行われた各演劇の舞台意匠や舞台装置に見ることができる。様々な演目に応じた舞台背景デザインはもとより衣装デザインなども手掛けており、上演前の舞台を前にして八面六臂の活躍であった。



※



※



※

◆ 関西大学総合図書館の松竹座ポスター

関西大学総合図書館蔵の松竹座ポスターは大阪市西区御池橋「笠半」主人である笠谷氏のコレクションを寄贈いただいたもので、1929（昭和4）年から翌年にかけて大阪松竹座で上演されたものである。



※



※



※



※

◆ SHOCHIKUZA NEWS

松竹で活躍するなか、山田のオリジナルが見出される作品として、大阪・京都をはじめとした興行館のプログラムである「松竹座ニュース」があげられる。1923（大正12）年5月、大阪松竹座開場を契機に創刊された「SHOCHIKUZA NEWS」は松竹合名社大阪本社で制作され、山田は1924（大正13）年から1930（昭和5）年までその表紙絵を手掛けた。山田のほかにも複数のデザイナーがいたが、表紙隅に「SHIN」「Shin」「伸吉」「山田伸吉」のサインが認められ、これらは山田のデザインによるものである。

表紙絵は二色刷で印刷されているが、風景画や人物画、浮世絵風はもとより、アール・ヌーヴォー調やアール・デコ調、構成主義やビュッセルを彷彿とさせるものなど様々なタッチで描かれ、大正から昭和にかけて格調高いモダニズムが凝縮されている。もとより山田の手元には数多くの資料や画集があったものと思われ、それを大胆に模倣、再構成する手法で表紙を飾った。

1933（昭和8）年夏、大阪において待遇条件の改善要求を訴えた松竹楽劇部員が舞台をサボタージュした、いわゆる「桃色争議」がおこる。世間の共感やマスコミの追い風も受けて、楽劇部員の勝利におわるが、争議の責任をとって争議団長であった洋舞のトップスター飛鳥明子は退団した。翌年頃、山田は、「春のおどり」のトップスターで、日舞の女王として名をはせた東條薫と結婚する。いわゆる職場結婚である。新居は京都市上京区紫明町小山堀池にかまえた。1943（昭和18）年には長女永子が誕生する。



※



※



※



※

順風満帆のなか松竹を舞台に活躍した山田だが、1937（昭和12）年4月にながくホームグラウンドとしていた京都松竹座が全焼し、京都宝塚劇場に活躍の場を移している。山田は1944（昭和19）年10月に松竹を退社し、滋賀県野洲郡守山町西蓮寺に疎開、終戦を迎える。終戦直後は京都市にある日本木工産業株式会社に入社するが、再びフリーのデザイナーとして舞台に戻っている。松竹歌劇団創立30周年記念公演（1948年）では舞台装置・衣装を手掛けたほか、中座で上演された劇団新潮結成公演「夫婦善哉」や日劇でのオリガ・サファイア作バレエカルメンの舞台装置にも関わっている。1957（昭和32）年には大映映画「源氏物語・浮舟」の美術担当となっており、戦後も舞台で幅広く活躍していることがうかがえる。

山田が関係した最後の舞台は1959（昭和34）年の大阪・新歌舞伎座での「夏の踊り 花の凱旋門」（大阪松竹歌劇団）で、7月には同劇団から感謝状が贈呈されている。



⑭カーテン
⑮ラスト
⑰春の踊りラスト+三分位



⑪カプリー島物語

❖ 舞台背景画デッサン

山田の舞台背景画デッサンは、独自の方眼紙を使用したものもあるが、多くは画用紙に水彩絵の具などで描かれている。演目が不明なものもあるが、多くのデッサンには実際の舞台背景を設営するうえでの注意事項などの書き込みがあり、山田の豊かなデザインと色彩感覚がうかがえるとともに大道具の人たちへの配慮も感じられる。





玉置様
この額の
絵
マチス又
は
ピカソの
素描
を
持参
します



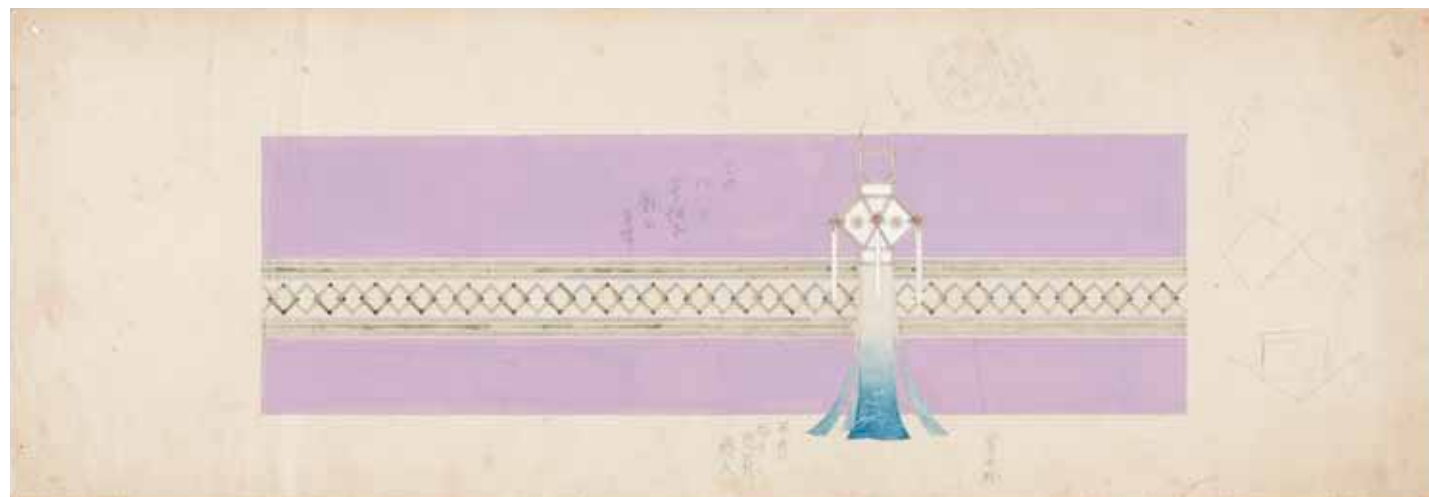
(乞返却)

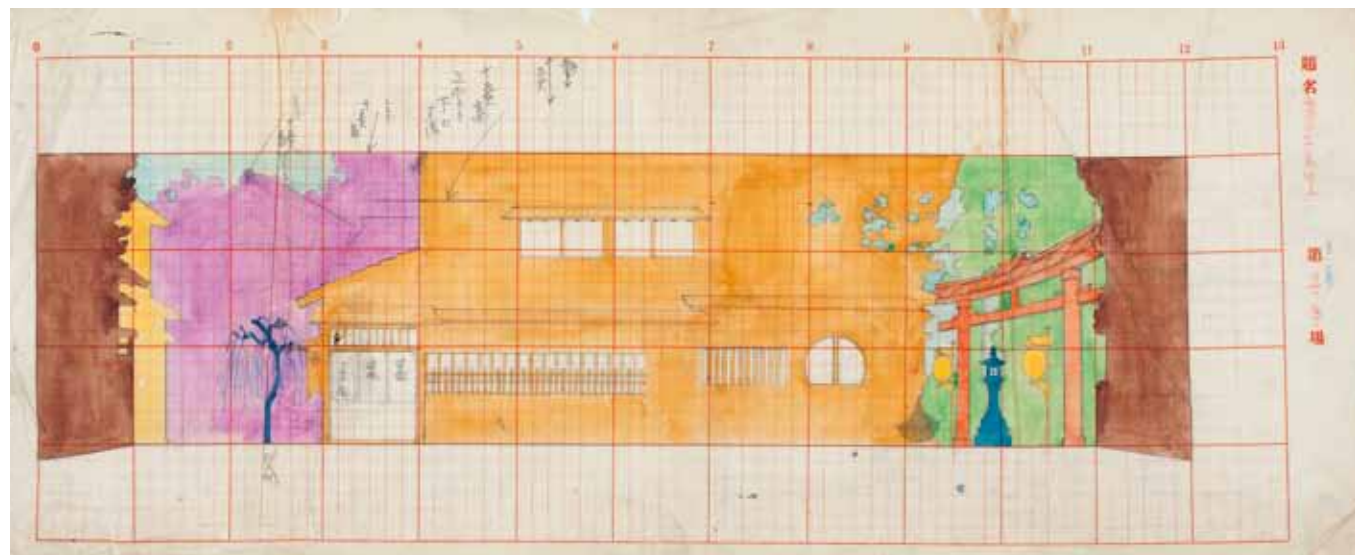


(俺が春)

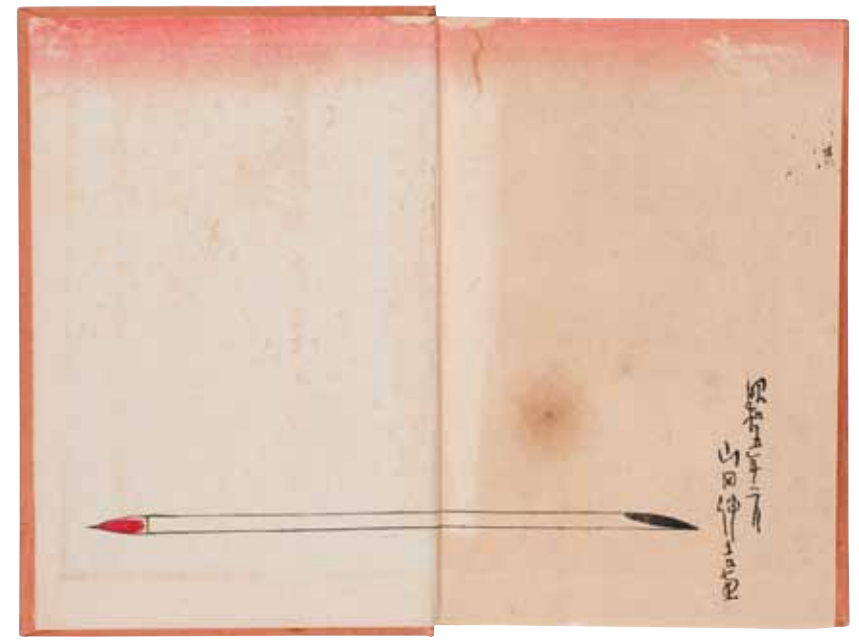


（第五景 英国）





大村映(外)(水戸藩子三郎)
 濡れ丸コルト(拳銃)
 山田仲吉(お茶屋)
 昭和廿三年五月十日大判



❖ 書籍の装丁

それまでの「SHOCHIKUZA NEWS」表紙絵での手腕が認められ、山田は書籍の装丁や表紙絵を手掛けるようになる。武田正憲『諸国女ばなし』（1930年4月）では、扉に浮世絵の美人画をモチーフにした女性を描き、裏見返し絵には紅筆を描くなどしゃれたデザインに仕上がっている。また雑誌『1934』（1934年1月）には西洋女性の横顔とデザインの「1934」の文字が踊り、丹羽文雄『浅草寺附近』（1941年1月）には組み紐を思わせる装飾的な文様を扉に採用している。



※



※



※



※

❖ 長谷川幸延と山田伸吉

山田を書籍装丁にもっとも多く採用したのは、大阪出身の小説家長谷川幸延(1904年～1977年)である。長谷川幸延は1923(大正12)年、初めて書いた戯曲『路は遙けし』が大阪・中座で上演されて劇作家としてデビューし、1939(昭和14)年には小説家を志して東京に移り、長谷川伸に師事、1940(昭和15)年には、『オール讀物』に掲載された『法善寺横町』が第12回直木賞に初めてノミネートされた。

山田と長谷川との関係は書籍装丁ばかりではなく、長谷川が脚色した東京劇場「ボッカチヨ」の公演(1950年)では山田が舞台装置を担当し、1951(昭和26)年から1956年頃まで、山田一家は東京都板橋区大谷口にあった長谷川幸延の旧居に移り住んでいる。

長谷川が手掛けた作品の装丁には採用されなかった作品もある。長谷川と池田弥三郎の共著である『味にしひがし』(読売新聞社・1975年)では、山田が描く浮世絵風の表紙は採用されず、岩黒永興とともに本文カットのみの採用となった。





※



※

❖ 大阪本と山田伸吉

芝居や劇場あるいは大阪の風物に通じた山田の挿絵には、古き良き大阪や芝居を彷彿とさせるものが多く、晩年には、大阪関係や芝居関係の表紙、挿絵を多数描いている。1970（昭和45）年には戸板康二『劇場歳時記』の表紙を手掛けたほか、柳永二郎『劇談・昔と今と』（東京新聞連載）挿絵や雑誌『演劇界』の「劇場スケッチ」を連載担当したほか、長谷川幸延『大阪芸人かたぎ』（1977年）、三田純市『道頓堀物語：小説 上方芸人譜』（1978年）、難波利三『大阪希望館』（1978年）の装丁を担当している。また浅田柳一『なにわ歳時記：忘れかけてる庶民史』（1981年）では、表紙を生田花朝の住吉祭りの御輿渡御を用い、挿絵を山田が担当している。

右頁にある挿絵原画は『大阪芸人かたぎ』に採用されたものである。道頓堀の劇場や街角、上方芸人を描いており、山田伸吉は大阪を代表する風俗画家として知られるようになった。

山田が大阪関係の書籍装丁を描き始めた1970年には吹田市で日本初の万国博覧会が開催され、道頓堀をはじめ大阪は次第に大きく変貌していく。山田の装丁や挿絵からは古き良き大阪を書きとどめる雰囲気をもてとることができる。



中村鴈治郎



桂春団治



六代目菊五郎・二世梅玉



二代目春団治



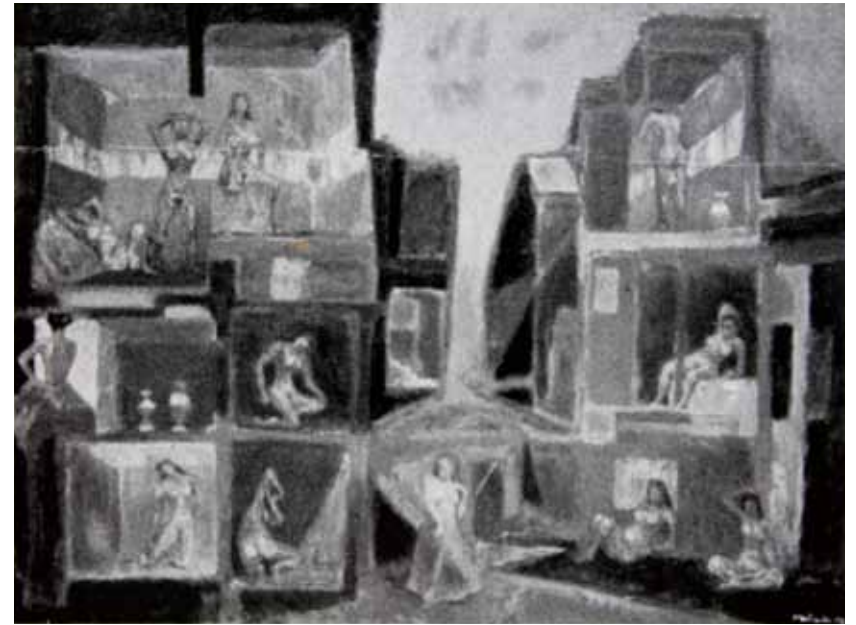
笑福亭松鶴



S. Y. NEWS (1950年) の表紙絵に採用



スケッチブックから



第63回二科展（1978年）《裏窓》

同展覧会カタログより

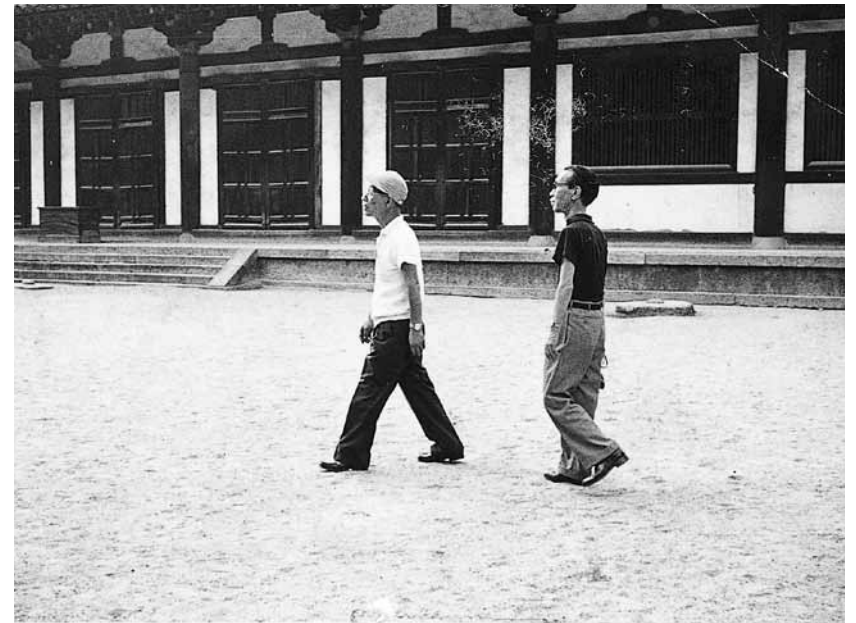
❖ 洋画家としての山田伸吉

京都松竹座が全焼した1937（昭和12）年に、山田は「山田岑吉」の名で第15回春陽会に《T画伯の像》・《T夫人の像》を初出品、入選している。以後は、山田伸吉名で1942年第20回春陽会まで連続出品しており、1961（昭和36）年まではほぼ毎年新文展、独立美術協会展、二科展に出品している。二科展カタログ（復刻版）に掲載された山田伸吉の画風は、それまでの芝居関係や書籍の装丁とは違い、単純化されたフォルムと重厚な質感を目指すものであった。

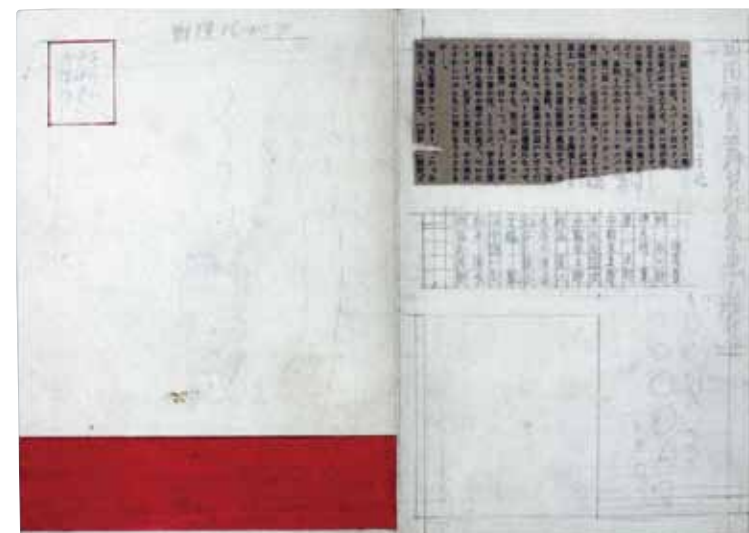
山田が初入選した第15回春陽会での展評は「同（鳥海青児）氏の作品にみる単純な熱情的表現には沢山の追随者があって、春陽会に新たな空気を齎^{もたら}せている」（栗原信「春陽会展評」『アトリエ』1937年5月号）と記され、山田は鳥海青児の画風を目指していたことがうかがわれる。

しかし同展評には続けてこのように記されている。「それらの亜流には直截に大膽に自然に肉薄して行く必然性が鳥海氏に見るが如く働いてゐない」。

山田にあっては、独自の画風を模索しなければならなかったのである。



山田伸吉（左）と鳥海青児



❖ 油彩芝居画

洋画家として苦悩するなかで、山田は長く親しんだ芝居を油彩で描くことを思いつく。先に掲げた日経新聞の記事では次のように記している。

「これまでも歌舞伎を描いた人はいる。古いところでは浮世絵の重要な題材となってきたし、近年でも油絵で描いている人もいる。ただ浮世絵もそうであるが、これまで歌舞伎を描くといっても、ほとんどが役者を描いたものであり、舞台があっても、それは背景にすぎなかったりであった。けれども、十八間の舞台全体を描くとなれば当然、横長のものとなる。そこで私はほぼ三対一の横長のキャンバスを自分で作った。八号の大きさに描いたものが中心であるが、普通のものとは違い、縦二十センチに対し、横が六十五センチの大きさである。ペニヤ板にキャンバス地を使って作り上げた。」

1963（昭和38）年には京都・土橋画廊で初個展である「名舞台油彩絵」展を開催する。二科展にも出品するが、むしろここに山田独自の画風として「油彩芝居画」が開花したのである。

舞台背景画デッサンのなかにも役者が描きこまれている作品がある。舞台背景のデッサンとしては人物が描きこまれていると不都合が生じる。そのため、役者が描きこまれた舞台背景画デッサンは油彩芝居画のための下絵であったのであろう。

右に掲げたのは、山田自身が作成した「山田伸吉画伯 舞台印象画 頒布会」の案内レイアウト。往復はがきを想定しており、推薦者には柳永二郎、英太郎、市川左団次、長谷川幸延の名がみえる。頒布作品は「助六由緒江戸桜」「暫」「寿曾我対面」「トスカ」などで、定価2000円とある。















忍平翁作
 修禪寺物語
 山田伸吉書
 一九八〇年

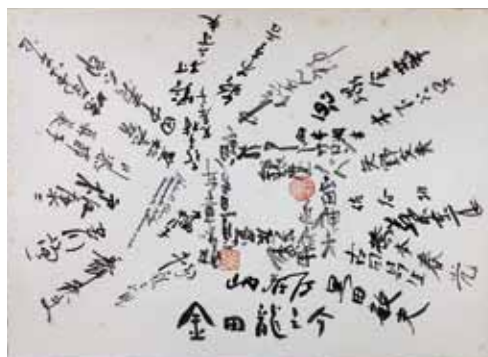
默阿翁作
 禪記流花月集
 高橋瑞
 山田伸吉書
 一九八〇年



❖ 山田伸吉 ラスベガスへ

京都・土橋画廊で初個展以降、ほぼ毎年、各地で「油彩芝居画」展が開催されて好評を博した。1972（昭和47）年3月には大阪・アベノ近鉄で同業者仲間でもある大塚克三と共同で「舞台美術展」を開催している。1975（昭和50）年6月にアートサロン銀座ノバで開催された「近作油彩芝居画展」での寄書色紙をみると、今東光、中谷泰、戸板康二、金田龍之介など多士済々が集っている。そうしたなかで「油彩芝居画」は国内ばかりではなくアメリカでも売れたようで、それが機縁となって1973（昭和48）年10月末に山田はアメリカに外遊することになる。

ヒルトンホテル社長であるヘンリー・ルウィスがラスベガスにある同社の系列劇場を取り壊し、そこに純日本的な飲食街をつくる企画のために山田はラスベガスに招かれる。『さんけい藝能』112号（1974年1月）には、「ラスベガスに大阪の法善寺横丁をこしらえてくる」と旅立った山田の姿とその詳細を伝えており、その試みはおそらく成功しなかったが、山田にとっては初の外遊で、ラスベガスの町並みを描いたスケッチが残る。



アートサロン銀座ノバでの寄書色紙



道頓堀

町へ下りて
今 装飾 道頓堀

道頓堀

今昔

問はし

アスファルト

今昔

今昔

今昔

今昔

今昔

なりぬ

今昔

今昔

今昔

今昔





◆道頓堀今昔

関西大学大阪都市遺産研究センター蔵《道頓堀今昔》は山田伸吉が描き、長谷川幸延が賛文を寄せた作品で、かつて芝居町として賑わった大阪道頓堀の太左衛門橋から南側を臨んだ風景が描かれ、道頓堀川に浮かぶ屋形船や浜側に立ち並び芝居見物の人々が集う芝居茶屋、その奥には「道頓堀五座」のうち、左から朝日座・角座・中座の屋根がみえ、まさに古きよき道頓堀をイメージさせる作品である。

文中にもある「すし半松五郎」が取り壊された時に持ち出され、2010年に寄贈を受けた。

1981年3月19日に山田は逝去するが、肥田皓三氏によれば、同年6月14日に「すし半松五郎」の広間で山田伸吉をしのぶ会が開かれ、その壁にはこれと同じ図様のものが描かれていたとされる。



年 譜

和 暦	西 暦	事 項 (松竹関係・装丁)	画 業
明治34	1901	出生	
大正 9	1920	2. 松竹キネマ合名社（映画）設立	
11	1922	この頃、大阪松竹宣伝部に入社か	
13	1924	1. 京都・明治座焼失。その後、松竹座として開場 2. これ以降昭和6年まで「SYOCHIKUZA NEWS」（表紙絵）	
昭和元	1926	4. 「春のおどり 花ごよみ」初演	
2	1927	12. 南座「龍巻」（舞台意匠）	
3	1928	3. 第2回「春のおどり」（舞台意匠：大森正男）	
4	1929	2. 京都松竹座「モンゴールの王子」（舞台意匠） 4. 京都松竹座「春のおどり」（緞帳意匠） 5. 京都松竹座「春のおどり」（舞台意匠） 7. 京都松竹座「馬と昆虫学者」（装置） 9. 京都松竹座「東西妖婦風情」（舞台意匠）	
5	1930	4. 武田正憲『諸国女ばなし』（装丁）	
6	1931	4. 京都松竹座「春のおどり」（舞台意匠） 9. 南座「大レヴィウ 夏」（舞台意匠）	
7	1932	1. 南座「松竹大レヴィウ 初春万華鏡」（舞台原案）装置：大森正男 4. 京都松竹座「春のおどり」（舞台装置：山田伸吉・大森正男） 8. 京都松竹座「ペラ・フランカ」（舞台意匠：三林亮太郎、山田伸吉）	
8	1933	2. 南座「ピュウティ・ランド」（洋装・舞台意匠） 4. 京都松竹座「春のをどり」（舞台装置・衣装原案）	
9	1934	1. 雑誌『1934』（表紙絵） 8. 大阪劇場「カイエ・ダムール」（舞台装置） この頃、東條薫と結婚	
10	1935	5. 京都松竹座「春のおどり」（舞台装置・衣装原案）	
11	1936	4. 京都松竹座「はるのおどり」（舞台装置・作詞）	
12	1937	4. 京都松竹座全焼	第15回春陽会《T画伯の像》・《T夫人の像》（山田岑吉）
13	1938		第16回春陽会《管弦団》
14	1939	6. 京都宝塚劇場「レヴィウ ロッパ自叙伝」（装置・舞台衣装）	第17回春陽会《ギターを弾く男女》
15	1940	8. 京都宝塚劇場「ロッパの蛇姫様」（装置・舞台衣装）	紀元2600年奉祝美術展覧会《陶工》 第18回春陽会《三人の女》・《静物》・《水辺の女達》
16	1941	1. 丹羽文雄『浅草寺附近』（装丁）	第19回春陽会《馬》・《収穫》
17	1942		第20回春陽会《枕太鼓》・《静物》
18	1943	永子誕生 2. 大岡龍男『なつかしき日々』（装丁） 12. 長谷川幸延『勝鬨』（装丁）	第6回新文展《瓦焼》 第13回独立美術協会展《雪》
19	1944	10. 退社	
20	1945	4. 上京区紫明町小山堀池から野洲守山西蓮寺へ転居	
21	1946	11. 日本木工産業株式会社に入社	
22	1947	12. 雑誌『男女』創刊号（中矢書房）（表紙絵）	
23	1948	松竹歌劇団創立30周年記念公演（装置・衣装）	33回二科展《CELLIST》・《教会堂》

和 暦	西 暦	事 項（松竹関係・装丁）	画 業
昭和24	1949	11～12.「東京新聞」連載の柳永二郎「劇談・昔と今」（挿絵）	第3回連合展に出品（二科会より）
25	1950	鎌倉市材木座に居住 6. 劇団新潮結成公演「夫婦善哉」（中座）（舞台装置） 12. 東京劇場「ボッカチヨ」（長谷川幸延脚色）（舞台装置）	
26	1951	板橋区大谷口（長谷川幸延旧居）に居住 日劇でオリガ・サファイア作バレエカルメン（舞台装置） 4. 日劇ダンシングチーム「ゴールドパラダイス」（舞台装置）	
27	1952	映画「大仏開眼」（舞台装置：東郷青児・山田伸吉）	
32	1957	住吉区粉浜東之町に居住。松竹から独立し「株式会社大阪松竹歌劇団」発足 4. 大映「源氏物語・浮舟」（美術担当）	
33	1958	この頃「BALLET」谷桃子「レ・シルフィード（一幕）」（美術：小磯良平・山田伸吉）	
34	1959	浜寺諏訪森に居住 7.「夏の踊り 花の凱旋門」（新歌舞伎座）（舞台装置・衣装）。感謝状贈呈	二科展に出品
35	1960	7.『大阪新夕刊』の「粹談つれづれ草」に「イレズミ談義(上)」「森林は語らず」を執筆	関西一陽会に出品 二科展商業美術部に出品
36	1961	8月～10月には枚方市三栗に居住	二科展《二人の女》
38	1963		京都・土橋画廊で「名舞台油彩絵」展。初の個展
39	1964		5. 御園座で「油絵舞台画展」
40	1965		大阪大丸、東京大丸で個展
41	1966	6. 長谷川幸延『味の芸談』（装丁）	8. プティサロンで油彩画展
42	1967		大阪大丸、中座、名古屋御園座で個展
43	1968		大阪大丸、名古屋御園座、岐阜丸物で個展
44	1969		津市文化会館で個展
45	1970	5. 長谷川幸延『新・おんながた考』（装丁） 8. 戸板康二『劇場歳時記』（挿絵）	2. ギャラリー日本一（大阪）で「新作油彩芝居画展」
46	1971	6. 天牛新一郎翁を讃える会に参加	
47	1972		3. アベノ近鉄で「大塚克三・山田伸吉舞台美術展」 6. 四日市風流倶楽部画廊で「名舞台油彩画展」
48	1973	10. アメリカへ外遊	
49	1974	「さんけい藝能」にカットを連載	1. 二科展招待出品《画室の女性達》 7. ヒガシ画廊（中津川市）で「新作油彩芝居画展」
50	1975	1～「佼成新聞」（立正佼成会）に「佼成会点描」を連載 1. 池田弥三郎・長谷川幸延『味にしひがし』（本文カット） 1.『大阪春秋』に座談会「ミナミ夜話一鷺谷樽風氏を囲んで」が掲載 6.18『日本経済新聞』文化面（24面）に執筆	6. アートサロン銀座ノバで「近作油彩芝居画展」 朝日新聞文化厚生事業団「寄贈書画工芸作品展」に油彩を寄贈
52	1977	10. 長谷川幸延『大阪芸人かたぎ』（挿絵）	9. 二科展に「画になる前」を出品
53	1978	8. 三田純市『道頓堀物語：小説 上方芸人譜』（装丁） 9. 難波利三『大阪希望館』（装丁） 1～12. 雑誌『演劇界』（劇場スケッチ）連載	3. アベノ近鉄ギャラリーで個展 9. 二科展に「裏窓」を出品
54	1979		8. 四日市近鉄「新作油彩芝居画」展 朝日新聞文化厚生事業団「一流美術家と名士の作品展」に作品寄贈
55	1980		8. 四日市近鉄「歌舞伎舞台油彩画」展 9. ナルミヤ戎橋画廊で「歌舞伎花形油彩大顔展」
56	1981	3.19 没。6.14 しのぶ会 6. 浅田柳一『なにわ歳時記：忘れかけてる庶民史』（挿絵）	

参考文献

- 西村美香 「1920年代日本の映画ポスター—松竹合名社山田伸吉の作品について—」『デザイン理論』37号（1998年）
- 松本茂章 「OSK80年の夢」第16回「モダンガール・東條薫」（『月刊大阪人』2004年9月号）
- 「OSK80年の夢」第17回「モダンボーイ・山田伸吉」（『月刊大阪人』2004年10月号）

凡例

本図録は平成24年12月1日から15日に関西大学博物館で開催する関西大学大阪都市遺産研究センター主催第4回大阪都市遺産フォーラム「道頓堀今昔—芝居画家山田伸吉の世界—」に関して開催した特別企画展の展示図録である。

展示に関しては、肥田皓三氏（関西大学元教授）、関西大学総合図書館の協力を得た。

なお掲載資料のうち※のある資料は関西大学総合図書館の所蔵で、その他は関西大学大阪都市遺産研究センター所蔵である。

図録には主要な資料のみを掲載した。

図録は長谷洋一（センター研究員）・櫻木潤（センター特任研究員）が編集・執筆した。

関西大学 大阪都市遺産研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL: 06-6368-0095

FAX: 06-6368-0092

E-mail: osaka-toshi@ml.kandai.jp

2012年12月1日発行